

EurekaIX

六年制通信 No.12 令和3年7月9日(金)号

教育は将来への投資である

昔から「自分への最大の投資は教育である」と言われています。なるほど若いうちに自らを教育するかしないかでは、将来に大きな開きがあるでしょうね。ではその教育ですが、これも昔から知育、体育、徳育という三つの柱があるとされてきました。私たちの校訓「真剣味」はこの三つを示しています。「真、すなわち知育に真剣味たれ、剣、すなわち体育に真剣味たれ、味、すなわち徳育に真剣味たれ」です。

このうち、徳育は、自分一人で生きていくことはできないことを、小さいころから友だち、先輩後輩、先生たちの中で理解していくということです。大きく言えば、社会での規範を学ぶ場として学校教育を捉えているのです。理性の力が感情をコントロールすることを知り、その理性の基盤として様々な知識が必要なのだということを理解するのが中学から高校にかけてではないでしょうか。子供は成長し、思春期を経て本当の自分の姿を知るものですが、その過程をどのような教育の光を浴びて過ごすのか、それはとても重要なことだと思います。自分の教育に最も責任のあるのは、むしろ自分自身ですが、どのような仲間に関われるか、つまりどのような集団に属して教育を受けるかといった、自分が身を置く環境も大切です。

体育については、これが最も大切だという人も多く、健康（あるいは健康を害するものの知識）を学ぶことと合わせて体力の増強を図ることは、確かに私たちの幸福の根底にあると言えます。学校では様々な競技を通して体育の授業が展開されています。各種競技の体験は学校でしかできないことでしょうから、バレーをやったりバスケットをやったり卓球をしたりすることはいいことです。でも基本的に体力の増強は、週に2、3回の授業で図れるものではありません。特に君たちのように、骨格も筋肉も大きく強くなる時期の若者は、食習慣や睡眠の大切さは言うまでもなく、走ったり腹筋したりストレッチをしたり、毎日できる「筋肉への刺激」が必要です。

さて、知育ですが、これは学校では教科の知識と考えられます。中学生になって初めて習う科目もあります。英語がそうですね。小学生の時にすでに英語を習っていると思うかもしれませんが、あれは英語に触れているのであって、科目として論理的に習うのは中学生になってからです。どの教科も高校に入ると少し高度な知識になりますが、どのレベルまで教えるのかという拠り所は大学入試です。入試問題に対応できるレベルの知識をベースにしているのです。アルファベットさえ正確に書ければ大学に入れるとなれば、今のレベルの英語の授業は絶対に存在しないでしょう。残念ながら中高の教科は大学受験に縛られていると断言してもいい。そうであれば、やはり知識の習

得がまず必要になるのです。ことにマークカードによる客観テストに対応するには、つまり時間以内に全部を解くには、知性とか知恵とかいう以前に十分な知識が求められます。本来なら知性や知恵といったものは、何よりも大切なもののなのに、学校での教育で十分に育まれるかといえば疑問だと私は思います。しかし、intellect（知性）を育てる基礎にはやはり知識があり、読書の習慣などがあるのですから、それらに目を向けさせることは学校でできると思います。そう考えると、君たちが難しく考えているかもしれない教科の知識も、何のことはない、将来への基礎、つまり投資に違いないわけです。勉強する基礎を作るのが中学・高校とすれば、君たちが社会で真価を問われるのはまだ先のことですね。しかし、必ずやってきます。仕事をしていくと、経験したことのない新しいことが次々に起こるものですが、真価を問われるのはそのときです。簡単に言うと、その時に独学する力があるかないかが大きな問題になるということです。いついつまでにこれだけのことを覚えなければいけないとか、これだけのことを理解しなくてはいけないとか、そういう場面が必ず出てくると思います。そのとき、目の前に置かれた課題の量と質（＝難しさ）、そして与えられた時間とを正確に把握し、自分の能力を冷静に分析し、一日に使える時間を考え、求められることを達成していくには、独学する力が必要です。そして、その力は今まに行っている教科の習得によってつけることができます。さらに言えば、中高の時代に学習において何らかの成功体験を持っていると、独学する力が身に備わるのではないかと思います。うまくいった経験は挫折よりも人を成長させるのではないか、そう思うようになりました。

今週のおすすめ

- ・ 藤原正彦 『若き数学者のアメリカ』（新潮文庫）

北杜夫の『どくとるマンボウ青春記』、小松左京の『やぶれかぶれ青春記』、畑正憲の『ムツゴロウの青春記』、高野秀行の『ワセダ三畳青春記』など、タイトルにわかりやすく青春記と書いてある本は、ある程度フィクションだろうと思っています。それは別に責められることではないし、げらげら笑える青春記を読んで、そこから読書に親しむようになる人も多いのですから、むしろ楽しく書いてもらった方がいいくらいですよ。ちなみに私は高野さんの本が一番笑えました

青春記と銘打っていない本にも明らかな青春記が、しかも傑作があります。二冊紹介しましょう。一つは落合信彦の『アメリカよ！あめりかよ！』、もう一つが藤原正彦の『若き数学者のアメリカ』、二冊ともアメリカに渡った若者のドキュメンタリーです。落合さんはほとんど密入国みたいな感じですが、藤原さんは数学者としてコロラド大学に招かれての渡米です。新田次郎を父に藤原ていを母に持つ正彦青年が帰国後に書いたのがこの本で、日本エッセイスト・クラブ賞を受賞しました。藤原さんは「国家とは国語である」との信念をお持ちで、メディアでもその方面の発言が目立つので数学者であることが意外に思われるようです。さて、内容は、これはもう読んで下さいでいいでしょう。私が読んだ中でも屈指の青春記です。

BGMは Leola の *I&I* でした…。